

素 囃 子 の 変 遷 (六)

竹 本 幹 夫

【シラバヤシに付属する秘事の消長】

室町後期の観世大夫道見の時、シラバヤシを演奏したのを、金春方太鼓役者彦九郎が、「今春ニハナキモ増シジャ」と嘲笑した由、『近代四座役者目録』にある。〈三輪〉〈杜若〉のシラバヤシは観世流の秘伝であり、金春流には存在していなかったのである。ところがシラバヤシの細部に多くの秘事を付属させる〈三輪〉の場合、これらの秘事の形成にはとくに金春系の〈三輪〉の神楽の秘事が大きな役割をはたし、一方、シラバヤシ自体にはこうした秘事はもとも存在しなかった可能性もある。以下、〈三輪〉のシラバヤシの秘事の消長ということを中心に、江戸期シラバヤシの習い事としてのあり方を概観しよう。

1 二段のユリ・七五三のユリ

由良家藏天文20年『笛秘伝書・上』に「三輪は神道にて真也。殊更大事也。笛、序の内に二段のゆりとして吹様あり。七五三と云事あり」とのシラバヤシ説がある。前者について

輪〉シラバヤシの定型的秘事として名目が見え、『金春安照伝書・丙本』に『笛秘伝書』

同様の記事が見える他は、管見に入らない。

後者については、『龍吟秘訣』に〈三輪〉神楽の序の秘事とし、又、由良家藏慶長16年『花笛集・上』や前掲『安照伝書』に〈三輪〉シラバヤシの前半部の段落ごとに吹くユリの数を「七五三」と称し、江戸中期の『隣忠秘抄』はこれらに基づく変形された異説を記す。

いずれの秘事も神道に付会されており、本曲に独自のものであったと考え得るが、シラバヤシに本来の秘事であったとの確証はない様であり、或はともに序の部分の秘事であった可能性もあろう。両者の関連についても不明である。シラバヤシ部分が序の部分の崩シであるとの想定に立てば、両部分に共通のアシライの奏法がシラバヤシの秘伝化に伴って各個の秘事となり、右の様な異説を生じたとも考え得ぬこともないが、確言はできまい。

2 三つ拍子

神楽直前の「早振る」の謡い出しと大小

太鼓の序の頭との関連についての秘事。鴻山文庫藏天文23年宮増弥左衛門『小鼓口伝集』以下、伊達文庫藏承応2年『桜井安澄芸道伝授状』(金春系)など、江戸前期頃までの伝書には、これをシラバヤシ秘事とする説は見えない。江戸中期以後、『真徳鏡』など下掛り系能伝書にこれをシラバヤシにも付会する立場が生じたらしく、上杉家藏『横本口伝書』(下掛)や江戸後期幸流系手付類では、これを3や4の秘事と同一視するらしい記事もある。観世系秘伝に名目の見えぬ秘事であり、金春系の〈三輪〉神楽の序の秘事がシラバヤシに付会されたものであろう。

3 摺り拍子

『花笛集・上』に「今春方に神楽の三段目にすり拍子とて心の程といふ事有也」とし、『少進聞書』等の下間少進伝書にも、金春大夫巖運所伝と称して〈三輪〉神楽の秘事の名目とする。『童舞抄』等には〈朝長〉饞法の太鼓の頭にも同名目のある由であるが、関連は不明。これに対し、前掲の江戸中期頃『横本口伝書』では〈三輪〉神楽の序の部分につづく特殊な足遣いの名目となり、名目のみ記す『真徳鏡』、『豊高日記』等はこれを〈三輪〉シラバヤシの秘事と認識するのである。能楽研究所蔵『大鼓口伝書』や鴻山文庫藏『催花柳』付載記事など、『寛文書上』にすでに〈三輪〉に

「摺り拍子」の名目を掲げていた葛野流系の江戸後期手付類では、4の「三つ頭」に対応するシテのシラバヤシ秘事も記す。右二書や観世新九郎家文庫蔵『風鼓秘曲集・天』は序の後にある〈三輪〉シラバヤシの秘事とし、三書いずれも、これを4同様「誓納」の構成要素の一つとする。演出上は『横本口伝書』と同系統の技法を基本とするものらしい。

本誌278号の拙稿で、「摺り拍子」をシラバヤシ本来の秘事としたのは誤りで、古くは金春系の〈三輪〉の神楽秘事であったと見るべきであろう。名目からも足遣いに関する秘事であることは確実視され、その故に序の後にもし置かれたのであろうか。『大鼓口伝書』によれば、「太鼓ト仕手之拍子ト太鼓ト入違く打行、此内ニ仕手見付柱迄行キ、角トリテ拍子ヲフミ、留」というものであった。

4 三つ頭

『童舞抄』等で下間少進が〈三輪〉のシラバヤシの秘事とする説が管見では最も古く、シラバヤシの二段目と三段目の間に下居する所作に合せた太鼓の頭を指すという。藤田家蔵元和2年『梅花集・律』以下の江戸期の諸書にも同様の説が見える。他方、前掲『安照伝書』、能楽研究所蔵『今春大蔵両家習秘伝之条々』、『横本口伝書』等には、〈三輪〉の神楽の秘事名目とする。室町末の正統的シラバ

ヤシ秘伝には見えぬ名目であるから、これも古くは金春系の〈三輪〉神楽の秘事であったと考えた方がよい。鴻山文庫蔵『笛遊舞集』などのシラバヤシ秘伝に、その二段目の末に調子を変える所があり、「平調返シ」を吹くとの説があり、これなどをもとに少進がシラバヤシに「三つ頭」を転用したとも考え得る。

なお、この秘事が観世新九郎家文庫蔵『秘印小鼓伝書』にないとした本誌前々号の拙稿の記述は、見落しによる誤りであった。但し、「三つ頭」を含む金春系の秘伝が「誓納」を派生させたとの拙稿の主旨は変わらない。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

以上、ほとんどが本来は神楽の秘事がシラバヤシに習合されたものと考えられ、シラバヤシ独自の秘事は、少なくとも江戸期にはまったく存在しなかったらしい。本来そうした秘事がなかったか、又は室町末以前に伝承が断絶したかのどちらかが考えられる。誤解や付会の上に秘伝が構成され、この様に諸説錯綜したのであろう。そして、江戸期シラバヤシ秘伝の形成に下掛り系の神楽秘事が大きな役割をなした最大の原因は、少進・安照という金春系の代表的役者がそれぞれに、〈三輪〉のシラバヤシにとくに注目したことにあるといつてよかろう。

〈完〉

実践女子大学専任講師 V